消えたタンカー

長編推理小説

西村京太郎

光文社文庫

KOBUNSHA BUNI

光文社文庫

長編推理小説
消えたタンカー
著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）

昭和60年5月20日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　凸版印刷

発行所　株式会社　光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Kyōtarō Nisimura 1985
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70145-0　Printed in Japan

光文社文庫

長編推理小説

消えたタンカー

西村京太郎

光文社

『消えたタンカー』目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

第一章　燃えるインド洋　7
第二章　六人の生存者　24
第三章　第一の犠牲者　41
第四章　大井川鉄橋　74
第五章　非常線　108
第六章　日本人町（リトル・トウキョウ）　144
第七章　南の島　163

第八章　沖縄の攻防　199
第九章　雪の中の結末　242
第十章　新しい疑惑　267
第十一章　タンカー事故　275
第十二章　消えたタンカー　314
第十三章　幻の敵を求めて　329
第十四章　暗闇の中の男　360
解説　二上洋一　389

第一章　燃えるインド洋

1

十二月五日。午後五時三十分。

北インド洋は、まだ日没に遠く、亜熱帯の強い太陽がコバルトブルーの海に降り注いでいる。

白川水産所属の遠洋トロール漁船「第五白川丸」四五〇トンは、アフリカ沖でのカツオ漁をおえ、インド大陸の南約一千キロの沖合を、日本に向けて帰途についていた。

ところどころに赤さびの見える船体が、九カ月にわたる遠洋漁業の辛さを物語っていたが、乗組員たちは、久しぶりに日本の土が踏めることで、子供のようにはしゃいでいた。

インド洋は、日本近海とは逆に、夏は荒れやすいが、冬季はモンスーンもなく、凪いだ日が多い。

この日も、風速二・五メートルの微風。二百メートルから三百メートルという大きな、長い波が、ゆったりと船をゆするだけである。

赤道に近く、暑い。

（故郷の焼津は、今ごろ夜の十時くらいだな）

と、船長の鈴木晋吉が、海図机を見て呟いたとき、

「前方に火災！」
と、見張員が怒鳴った。
船長は、双眼鏡を眼に当てた。確かに、前方の海面に黒煙があがっている。チラチラと赤い炎が舌を出している。船長は、とっさに船火事と判断した。
「前進全速！」
船長は、操舵手に向かって、大声で命令した。四五〇トンの船体は、大きく見ぶるいしてから、エンジンの唸り声を立ててスピードをあげた。が、カツオを腹いっぱいに詰め込んだ船体は、せいぜい十一ノットの速力しか出ない。
「通信長。ＳＯＳを受信したか？」
鈴木船長は、双眼鏡を眼に当てたまま、大声できいた。
「今まで受信していません。ラジオブイの発信もなし」
「おかしいな。あれは、どう見ても船火事だぞ」
船火事なら、当然ＳＯＳを発信しているはずなのに、受信しなかったというのは解せない。
熱帯の落日は、唐突にやってくる。西の水平線に、真紅の太陽が沈みはじめると、周囲の海面は、コバルトブルーから赤に、そして暗紫色に変わっていく。それにつれて、今まで黒煙の中に、小さく顔をのぞかせていた赤い炎が、急に鮮明に輝きだした。
約千メートルまで近づいたとき、鈴木船長は、思わず、「海が燃えている」と呟いた。眼の前の光景は、海が燃えているとしか形容ができなかったからである。

直径約千メートルに近い、やや楕円形の海面が猛烈な勢いで、炎を吹きあげているのだ。黒煙は数百メートルの高さまで立ちのぼり、微風にのって西南に流れ、その巨大なカサが第五白川丸の頭上を蔽った。黒煙のために太陽がさえぎられ、周囲は夕闇が立ちこめたように薄暗くなった。

千メートル離れていても、「ごう、ごう」という炎を吹きあげる凄まじい音が聞こえてくる。これ以上近づくのは危険と感じて、船長は、停船を命じた。

船長はブリッジを出て、甲板上通路を渡り、船首甲板に出てみた。ほかの船員も、みんな、甲板にあがってきた。

巨大な火の柱だ。

第五白川丸の船体も、甲板に集まった船員たちの陽焼けした顔も、炎の照り返しを受けて真っ赤に染まっている。どの顔も堅くこわばっていた。

そして、猛烈に熱い。

「どうやら、石油ですな」

と、五十七歳の漁労長がいった。

「すると、タンカー火災か」

鈴木船長は、食い入るように、炎を吹きあげている海面を見つめた。

「たぶん、流出した原油が燃え出したんでしょう。船があの炎の中だとすると、まず助かりませんね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「とにかく、海面を探して、生存者が見つかり次第、救助するんだッ」
鈴木船長は、潮がれした声で怒鳴り、双眼鏡を眼に当てた。
その瞬間、双眼鏡の視野の中に、影絵のような船体が見えた。船体といっても、船首の一部分である。巨大な船首が、炎の中で宙に持ちあがり、あっという間に、波間に消えてしまった。
「見たかね？」
船長は、前方を見つめたまま呟いた。
「見ました」
と、漁労長も、かすれた声でいい、つばを呑(の)み込んだ。海に生きる男にとって、船が沈むのを見るほど辛いことはない。
黒い影絵のように沈んでいったので、船名もわからなかったし、どこの船かもわからない。あとは、相変わらず、吹きあげる火柱と、黒煙の渦が周囲を圧している。
太陽は、すでに沈んでしまった。頭上は暗黒なのに、海面付近は、炎上する石油(オイル)の火で、真昼のように明るい。
「右前方に浮遊物！」
突然、船員の一人が叫んだ。
船名を書いた浮き輪(ブイ)だった。船員が、長いカギ竿を持って走る。甲板に引きあげられた白い浮き輪(ブイ)には、どす黒い油がべったりとこびりついている。雑巾で、油を拭きとると、「第一日本丸」の文字が現われた。

「通信長！」
と、鈴木船長は、ブリッジをふり返って、大声で怒鳴った。
「すぐ、東京へ打電してくれ」
「東京の本社ですか？」
「いや。海上保安庁だ」
「何と打ちます？」
「今、電文を書く」
船長は、手帳を取り出して殴り書きすると、そのページを引きちぎって、通信長に手渡した。

コチラハ、遠洋トロール漁船「第五白川丸」。インド南端ヨリ約一千キロ、南緯三度〇分、東経七四度三分ノ海面デ、直径約千メートルニワタッテ、石油（オイル）ガ燃エアガッテイルノヲ発見ス。
マルデ、インド洋全体ガ燃エテイル感ジデ、黒煙ハ、数百メートルノ上空マデ立チノボッテイル。
タンカーガ沈没シ、流出シタ重油ニ引火シタモノト思ワレル。目下ノトコロ生存者ハ発見デキズ、重油ニ汚レタ浮キ輪（ブイ）ヲ見ツケタガ、ソレニハ「第一日本丸」ノ文字ガアッタ。
今後、イカガスベキカ指示ヲ乞ウ。

海上保安庁からの返電は次のとおりだった。

貴船ハ現在位置ニトドマリ、極力、生存者ノ発見ニ努力サレタイ。

「第一日本丸」ハ、ニュージャパンライン所属ノ、マンモスタンカーデ、五〇万重量トン。サウジアラビアノカフジ基地デ原油ノ供給ヲ受ケ、日本ニ向ケ帰投中デ、本日（十二月五日）ノ午後七時（日本時間）、本社ト無線連絡中、突然、交信ガ途絶エタモノデアル。

「日本時間の午後七時というと、この辺りでは、午後三時だな」

鈴木船長は、無電係の持ってきたメモを見ながら呟いた。

黒煙を発見したのが、午後五時三十分だから、時間的には符合している。おそらく、その電話が切れた瞬間、何らかの事故に見舞われて沈没し、積んでいた原油が海面に流出したのだ。そして、引火、爆発し、燃えあがったに違いない。

鈴木船長は、「了解」の返電を海上保安庁に打った。

五〇万トンのマンモスタンカーと聞いて、船員たちは興奮した。この船の、実に千倍の大きさだ。積んでいた油がもったいないという者もいた。海洋汚染の問題もある。

そのうち、強烈な輻射熱のため、第五白川丸の甲板まで、次第に熱くなってきた。鉄板が焼け、触れると飛びあがるほど熱くなっている。たまらず、船長は、

「船を二百メートル後退させろ！」

と、命令した。

再びエンジンがかかり、第五白川丸は、ゆっくり二百メートル後退した。が、それでもなお、甲板に立っていると、肌が火傷するような輻射熱の激しさだった。

鈴木船長は、やむなく、さらに三百メートル船を後退させた。

海面は、いぜんとして燃え続けている。黒煙は上空で広がり、星をかくしてしまっていた。出ているはずの月も見えない。

さっきから、船員たちはカメラを持ち出し、しきりにシャッターを切っていた。この炎の中に、たとえ生存者がいても、すでに黒焦げになってしまっているだろう。

火災はさらに一時間以上続き、発見後三時間たって、ようやく赤い炎の部分だけが消えた。

しかし、黒煙は、まだ、もくもくと立ちのぼり、原子雲さながらに広がったあと、傲然と、第五白川丸を見下ろしている。

赤道に近い海面だが、吹きわたる夜の風は涼しい。少しずつ、輻射熱がおさまってきたのをみて、鈴木船長は、「微速前進」を命じた。

「いいか。ありったけの照明をつけて、海面を照らすんだ。どんな小さなものでも見逃すなよ！」

集魚灯が舷側に並べられて点灯された。

船は、ゆっくりと前進した。船員たちは、手すりにつかまり、海面を凝視した。現場に近づくにつれて、鼻がひん曲がるような強烈な臭気が、船員たちを襲った。原油の焼けた臭いだっ

た。海面には、黒く焦げた原油のカスが、無数に漂っている。

第五白川丸は、くすぶり続ける黒煙の中を数回往復した。が、残念ながら、何一つ発見できなかった。

考えてみれば、それが当然だったかもしれない。三時間、あるいは、それ以上の長時間燃え続けたのだ。あの炎の中は、おそらく一千度以上の高温だったに違いない。人間も木片もすべて燃えつき、鋼鉄は海に沈んでしまったのだ。第一日本丸の救命ブイが発見できたことだけでも奇跡に近いのだ。

船長は、決断を迫られた。すでに、二時間近い捜索は徒労に帰した。今、すぐ、捜索を打ち切ったとしても、誰も非難はしないだろう。それに、船底には、いっぱいのカツオを積んでいるのだ。一刻も早く、母港の焼津に運ばなければならない。一日遅れれば、親会社に対して、何万、いや何十万円の損失を与えることになる。

だが、一方で、船長は、現場を去ることに強いためらいを覚えた。もし、第一日本丸に生存者がいて、暗い海に漂っていたらと考えるからだった。船長自身も、二年前、フィリッピン沖で遭難し、十七時間の漂流のあと救助された経験がある。あの時も、僚船が、諦めずに捜索を続けてくれたから奇跡的に助かったのである。

「あと十二時間、捜索を続行しよう」

船長は、しばらく考えたのち、部下を集めていった。

前方の黒煙は、原子雲のように立ちのぼったまま、凝固してしまったように動かない。

周囲の海面は、完全に夜のとばりに包まれてしまった。

本格的な捜索は、夜が明けてからということになるだろう。そう考え、船長は、乗組員に交代で眠るようにいい、自分も船長室で横になった。

第五白川丸は、エンジンを止め、甲板上の明かりをすべて点灯して、夜の海に漂っている。もし、第一日本丸の生存者が、付近の海を漂流していたら、この明かりに気がついてくれるだろう。また、十分おきに、汽笛を鳴らすことも、船長は命令しておいた。

船長は、一時間ほど眠ったところで、叩き起こされた。人声らしきものが聞こえたというのである。

船長は甲板に飛び出した。

2

海面は、相変わらず暗く、臭気だけが強く鼻をさす。

「右舷で、人声のようなものが聞こえたんです」

若い船員が指さす方向に、船長は眼をこらし、耳をすませた。

確かに、人声らしいものが、暗い海面から聞こえてくる。それに、パシャッ、パシャッというのは、オールを漕ぐ音だ。

船長は、右舷に部下を集めて、一斉に、「おーい」と怒鳴らせた。それにこたえるように、

「おーい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton